

続

お登勢

船山 馨



続
お登勢

船山
馨



続お登勢

定価七〇〇円

昭和四十八年九月二十日 第一刷
昭和四十八年十一月十日 第三刷

著者 船山 馨

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島／北
九州市小倉区粕屋町／名古屋市中区区堀内町

印刷 大日本印刷
製本 大日本印刷

検印省略

目

次

ひと握りの朝

七

勝者と敗者

五

光と影

四

麻布第三官園

三

五分の魂

二

積乱雲

一

螢火

二

暁闇

三

馬と狼

一三

対流

一四

咸臨丸

一五

落葉舞う

一六

南風

一七

西南戦争

一八

遠い声

一九

終章

二〇

装幀・口絵・挿絵
題字

手島 右卿
佐藤 忠良

続
お
登
勢

ひと握りの朝

明治六年という年は、いつもよりひと月ちかく早く明治五年の十二月三日にやってきた。新政府がこれまでの太陰曆を廃し、太陽曆に切替えたのだということであったが、お登勢にも父親の玉太郎にもなんのことだかわからなかった。

お登勢は御園の原生林のなかの掘立小屋で、正月休みで目の学寮益習館から帰ってきた甥の仙吉と、玉太郎の三人で二十五歳の正月を迎えた。玉太郎は五十六、仙吉は十四であった。

正月を迎えるといっても、小屋の煤を払い、仏壇がわりの粗末な棚にならんでいる貢とその両親の位牌に、淡路から移住するとき提げてきた白米と、手づくりの山葡萄酒を供えてしまえば、あとは貢の墓へ参るだけであった。

貢は小屋からすこし離れた、溪流を見下す樹林のなかの、土饅頭の下に眠っていた。眼下の溪流はいまは氷が張り、その上に雪が積って、白い帯を流したように見えていたが、そこはお登勢には忘れることのできない場所であった。

二年前の晩秋、貢の後を追って静内へ辿りついたお登勢が、最初に彼とめぐり会ったのが、その川の畔りであった。乞食のような風態の男が魚掬で鮭を突いていた。それが夢寐にも忘れたことのないなつかしい人の、交り合っていた姿であった。川洲を駆けおりて、泣きながら彼の両膝を抱きしめたお登勢を茫然と見つめたまま、

「これは夢ではないのだな、登勢。ほんとうに来てくれたのか……」

と、眩くように云った貢の声の慄えも、蓬のように振り乱れたざんぱら髪のあいだから光っていた両眼の潤みも、まだ昨日のことのように彼女の胸に灼きついていった。

お登勢は土饅頭を覆っていた雪を払い、櫛の木を削っただけ墓標に持参の山葡萄酒を供えて、ながいことそこに踞まつて冥目していた。あの人はいまもお嬢さまと一緒にのだらうか、という思いがふと胸をよぎり、彼女はかすかに頸を振って、その思いを押し退けた。

貢と志津の死体が、石狩の港に近い原生林のなかで発見されたとき、志津の亡骸は引取手がなかった。佐伯織部にすれば、志津は情人と駈落した不倫の妻であり、野晒のまま鳥やけものの餌食になっても、まだ心が癒えなかったかもしれない。しかし、たとえそうでなくとも、開拓使庁の高級官員としての彼の身分柄、世間の嘲侮を買うことなしには、情死同

然の妻を葬うことができないのも確かであつた。

東京の加納市左衛門にも知らせるには知らせた。だが、市左衛門もまた武士の戒律のなかで生き、いまでもそれに縛られつづけている種類の人間であつた。妻のはまがどんなにかき口説こうとも、不義を犯してその相手と一緒に死んだ娘を、夫の意志を無視して引取るなどというのは、侍の作法にはないことであつた。結局、志津の遺骨もお登勢が引取つた。

「できんことやろうが、許してやりいな。生きているうちはどうでも、死んでしまえばみんな仏さんや。貢さんのそばへ埋めてやるほうがええ」

玉太郎はそう云つたが、お登勢はきかなかつた。

お登勢にしても、いまだに志津を憎む気持はなかつた。むしろ、そのようにして身を滅さなければならなかつた志津の、女心のめくるめきが哀れであつた。

けれども、やはり貢とならべて志津を葬る気持にはなれなかつた。すんでしまつたことはいい。諦めもするし、忘れる努力もする。だが、貢はいまも彼女の夫であつた。たとえほかの女と情死もおなじ最期を遂げた夫であろうと、貢はいまもお登勢にとつただひとりの人であつた。貢への彼女の愛は、吉野川の舞中島の竹藪のなかで、初めて彼の抱擁をうけ入れたときとすこしも変らぬ激しさで、たぎり立ちながら心を満たしていた。

歳月が胸の火を鎮め、男と女の愛憎を越えて、哀しい人間同士としてのいつくしみで、貢の記憶を包むことができるようになるれば、そのときは共感をこめて、二人をひとつの墓に埋めることもできるだろう。だが、いまはできない。いまそれをすることは、自分を偽わることだ、とお登勢は思つた。

小屋へ戻つてみると、土間と屋根つづきの馬小屋は、玉太郎と仙吉が綺麗に掃除をすませてあつた。気持のよさそうに新しい敷藁のうえで、オテナとその子の白雪が満足そうに飼料桶に鼻面を突込んでいた。玉太郎のせめてもの祝い心なのであらう、飼料もいつもより多い目にあてがわれているようであつた。

お登勢は壁際の古葛籠つづらのうえに置かれてある、白布に包まれた素焼の甕かみにも白米と山葡萄酒と水とを供えて、少しのあいだ合掌した。それが志津であつた。

「考えてみりやア、人の一生ちゅうもんはわからんもんやな」
屠蘇がわりの山葡萄酒を舐めながら、玉太郎は葛籠のうえの骨甕に眼をやつて、なかば独り言のように呟いた。

「派手好きで贅沢なお人だつたというに、こないな北の果で眼をつぶらはつて、新しい年が来てもまだ戻るところもできのうて、こうしてはるんやからな」

「わたしね、こないだからお父ッあんに相談しようと思つていたんだけど、いまはどうせ仕事もできないんだし、ちょ

つと東京へ行かせてもらえんでしょうか」

「東京やて？ また、なんでや」

玉太郎は唇へ運びかけた茶碗の手をとめて、眼をまるくした。

お登勢は干大根の葉をまぜた稗雑炊をすすっている仙吉に、微笑を溜めた眼を向けて、

「去年の春、東京に開拓使の仮学校というのができたんですつて。仙吉がその話を益習館で聞いてきて、どうしてもそこへ入りたいって云うんです」

「そらあかん。可哀想やが仙吉、高嶺の花ちゅうもんや。餓え死せんのが不思議なくらいの、こんな貧乏暮しでは、逆立ちしても月謝はおろか、鼻血も出えへん」

玉太郎は肩を落して氣拙そうに頸を振った。

「官費生と私費生があるんだよ」

仙吉が箸を置いて膝を乗り出した。

益習館の寮生活のあいだに、彼は風貌だけではなく、内面的にも見違えるほどしつかりしてきているようであった。

「官費生には月謝も寮の費用も、すべて開拓使が出してくれるよ。そのうえ夏冬の制服から小遣錢まで支給されるから、家からは一文も要らないんだ」

「そらあまた、話がちいっとうますぎるやないか」

「そのかわり、卒業したら十年間は、開拓使の云いつけ通り

働かんならんけど、それは僕も望むところだ。どのみち、この土地を拓いて生きてゆかなければならないんだからね」
「それで、仙吉を送りがてら、お嬢様を加納の旦那様のところへお届けして来ようと思うんです」

お登勢はいろりに粗束をつぎ足しながら云った。

「あれからもう半年ちかくも経ったのですし、いつまでもお嬢様をこんなふうにおくのはお気の毒です。旦那様や奥様も向うから引取りにおいでになるのは世間態もあるし、佐伯様への義理もあって出来ないでしょうが、こちらからお届けにあげれば、どんなにかおよろこびなさるだろうと思うんです」

「そらあええことや。侍あがりちゅうても人の親には変りはない。心のなかでは仏さんのことが気がかりでしゃアないに決まったる。仏さんも親御のところへ帰れば安心ちゅうもんや」

と、玉太郎は薄く酔いの出た頬をほころばせたが、もういち度仙吉を振り返って、

「なあ仙吉。お前がどうしても行きたいんやったら、好きにしてええけど、ただほど高いものはないちゅうてな、うますぎる話ちゅうのは用心せなあかんで。ことに相手がお上のときはな。おえら方いうもんは、けっしてわしらのことなど考えてくれんもんやでな」

と、なかば独り言のように云った。

開拓使仮学校は、明治四年に開拓使顧問として来日したアメリカ農務局長官ホーレス・ケプロンの進言で、北海道拓殖の指導的人材を養成する目的で、明治五年四月十五日に開校したばかりであった。札幌農学校及び北海道大学の前身である。

場所のもと開拓使出張所のあった東京芝の増上寺境内で、校長格の学校掛は開拓使五等出仕荒井郁之助であった。箱館戦争のときの榎本軍の勇将である。

学科は普通科（予科）と専門科（本科）とに分れており、まず普通科で英語、漢文、数学、地理、歴史、物理、化学、植物の基礎学科のほかに、測量術、砵山学、機械学、及び初步の農学を習得したのち専門学科に進む。現在の中学と高校を併せたものに相当すると云えよう。

専門科は第一化学機械、第二鉱物地質、第三建築測量、第四動植物農学の四学科に分れ、そのいずれかを学生に選択させる仕組であった。

定員は官費生五十人、私費生五十人の計百人で全寮制をとり、普通科の応募資格年齢は、十四歳から二十五歳までと極端なく幅広い幅が広がっていた。

入寮生一人について、学校が定めた一ケ年分の費用概算表を見ると、

一、金四十五兩 食料

但、夜具、油、浴湯一式相添一日金二朱

一、金十一兩二分 夏服二度

但、上衣三組揃、肌衣二枚共相添兩度

一、金二十四兩 冬服二度

但、前同斷

一、金八兩 沓、キャップ料

但、一ケ年二度仕替の積りにて

一、金十二兩 筆紙墨硯石料

但、一ケ月一兩の積りにて

一、金一兩 髪挾料

但、隔月一度宛の積りにて

一、金十兩 生徒小遣錢

但、毎月曜日に分遣す

尤も月一度宛の積りにて

一、金十兩

但、夏服の内肌衣一度仕替

尚冬夏共服洗濯料

合計 百二十一兩二分

となっている。相当な金額で、右の概算表を見ただけでも、

開拓使がこの学校へかけた期待と意気込みが察しられる。

仙吉は仮学校の話を、益習館の教授方主任荒木重雄から聴いてきたのであった。

二年前津田貢が、開校したばかりの旧稲田藩益習館に入れてくれるまでは、貢やお登勢が炉の灰に字を書いて教えただけで、寺子屋も知らない仙吉であったが、入校してからの学業の進歩の速さは、荒木も眼をみはるほどであった。このままで終らせるのは惜しい、と彼は思った。

十四歳というのは応募資格の最年少ではあったが、仙吉ならその不利な条件も克服するにちがいないという期待が、荒木にはあった。彼が仙吉に仮学校の話をしたのは、そんな気持ちからであった。

正月二日の朝、お登勢は一張羅の、といつても洗い晒しの縞銘仙に、垢のつかないもんべに着換えて小屋を出ると、目の村へ降りていった。荒木や浅川繁、三善歩、岩根精一、吉田好達など、旧稲田家士のなかでも貢と親しかった人たちに、年頭の挨拶を述べるためであった。

荒木も浅川も、恰度御殿山の稲田屋敷へ、挨拶言上に出向いていて留守であったが、吉田好達は在宅であった。近く荒木重雄と婚礼することになっている娘の松子も出てきて、戸口で挨拶だけを述べて辞去しようとするお登勢を、手をとらんばかりにして小屋のなかへ招き入れた。

吉田好達には洲本の騒動のとき加納睦太郎に斬られて、ほとんど危うかったいのちを、彼の治療で助けられたこともあり、そのうえ、稲田の移住家士たちは開拓という仕事の性質上、青年が多かったが、好達は初老に近い年配でもあったので、お登勢も彼には気がねがなかった。

「仙吉を仮学校へやるのか。それはいい。これからは学問をした者が勝だよ」

好達は話を聴くと即座に賛成した。

「それなら、いま浦河に北垣国道さんが来ておいでになる。お登勢さんもあの人はよく知っているのだから、会って話してみてはどうだな」

「まあ、北垣様がおいでになったんですか」

「こんど、浦河支庁の三好清篤さんがやめさせられた。三好さんは土佐派の岩村判官に可愛がられていた人物だから、開拓使本庁が黒田次官の薩摩派の天下になって睨まれたんじゃない。かわって北垣さんが、浦河の主任官になられたわけだ」

よかった——と、お登勢は思った。

先年、東久世通禧が開拓使長官から侍従長に転出して東京へ引揚げて以来、彼の庇護のもとで羽振りを利かせていた土佐派は、次官とはいふものの、事実上の長官である薩摩の黒田清隆の勢力に圧迫されて、その凋落ぶりが開拓移民の口の端にものぼるほどであった。

北垣国道は兵庫の養父郡熊坐村の生れであり、戊辰の役には因州鳥取藩の部隊に参加した経歴の持主だから、薩土両派のいづれとも直接の関係はない。ただ彼は、文久三年に平野国臣らが、京を追われた東久世ら七卿の一人沢宣嘉を擁して但馬に挙兵した、いわゆる生野の乱に参加したことがある。その点から云えば、彼が東久世長官派、即ち土佐派に近いと見られても仕方のない立場であった。

だが、北垣にはそういう派閥関係を、初めから無視してかかっているところがあつた。東久世長官派が開拓使庁内を牛耳っていたところから、東久世であろうと黒田であろうと、北海道の開拓にとって有効な政策は支持するが、そうでないものは否定するという、彼の態度はかなりはつきりしていた。

野生馬による開墾地の被害を防ぐとともに、労働力としての馬を確保するために、日高一円に棲息している野生馬を捕えて、開拓使に買上げてもらうことを、お登勢たちが嘆願したときも、東久世派の佐伯織部の反対を押切つて、曲りなりにもそれを実現してくれたのは北垣であつた。

黒田が北垣のそういう私の無い人柄と才幹を買つたのか、あるいは消極的で良策に乏しかった東久世派とは、対立する場合が多かつたのが、準黒田派とみなされたのかはわからないうが、とにかく彼は没落した東久世派のなかで生き残つた、ほとんど唯一の人物となつていた。

お登勢には官員の世界のそういう陰微な事情はわかりもしないし、どうでもよかつた。ただ、北垣が自分たちの住む土地の責任者となつたことがうれしかった。

彼は筋の通つたことなら聴き入れてくれる。移住民の苦しみにも理解がある。すくなくとも、理解しようと努める人間であつた。官員風を吹かせるだけで、移住民など、地べたを這いずりまわる虫けらのようにしか思っていない、ほかの開拓使の連中とはちがうのだ。彼が赴任して来た以上、いままですより悪い状態がくることは、まずないと思つてよかつた。

「明日、新冠の御用牧のことで、岩根君が支庁に呼ばれているそうだから、一緒に行つてみなさんか」と、好達は云つた。

「明日ですか。三ヶ日だというのに、役所が開いているんでしょうか」

「そこが北垣さんらしいところさ。役所は休みだが、役宅で会いたいと云われるのだそうだ。仕事となると正月もなにもないらしい」

「御用牧のことつて云うと、なんででしょう」

「北垣さんはどうやら御用牧を發展させるために、全力を傾ける決心らしいな。敷地も拡げるし、設備ももつと整えて、ゆくゆくは外国産の馬も輸入して、馬種を改良してゆきたい御意向らしい。そのためには、外国から牧馬の専門家を招く

ことまで考えておいでなのだそうだからね」

「まあ……」

お登勢は息が詰ったようになった。貢があんな最期を遂げて以来、彼女の眸がよろこびに燃えて、生き生きと輝いたのは、これが初めてであった。

「わたし、北垣様にお目にかからなけりや……。岩根さんに連れて行っていただきます」

弾み立つような声になってお登勢は云った。

二月の声を聴いたばかりのある朝、お登勢と仙吉は品川の土を踏んだ。

恰度函館から品川へ向う咸臨丸という開拓使の御用船がある。北垣国道のはからいで、それに便乗させてもらったのである。静内から函館までは、咸臨丸で東京へ出張する浦河支庁の役人の一行に加わって、馬で陸行した。それも北垣の配慮であった。

咸臨丸というその機帆船は、勝海舟が遣米使節を送ってサンフランシスコまで、日本人の手で初めて太平洋を横断したときの乗船だということであったが、そんなことよりも、お登勢はなつかしさで胸が締めつけられるようであった。彼女はその機帆船が初めてではなかった。

貢の後を追って北海道へ渡るとき、そのころ東京にいた志

津の尽力で、いまとは逆に品川から函館までこの船に乗せてもらったのであった。二年前の秋の深まるころで、そのときも仙吉が一緒であった。そうして今度は、お登勢をこの船で渡道させるために、岩村通俊夫人や要人たちのあいだを奔走してまわってくれた志津が、ひと握りの白骨となって彼女の胸に抱かれていたのだった。

これはほんとうに現実なのだろうか。この二年のあいだのことは、みんな夢ではないのだろうか。眠りから醒めてみると、いまも自分はあの御園の小屋にいて、傍らで貢が疲れた寝息をたてているのではないだろうか。そうして、志津は札幌の官舎で、佐伯織部か久慈芳之助を相手に西洋の赤い酒を手にして、はなやかな笑い声を響かせているのではなからうか。

そんなふうに、お登勢はなん度となく、自分に確かめてみないではいられなかった。だが、船がゆるい波のうねりに揺れるたびに、胸に抱いた壺のなかで、囁やくように幽かな音をたてて志津の骨が鳴っていた。それが夢であるうはずはなかった。

貢も志津も、もういないのだ——と、お登勢は骨の囁やきを耳にしながら、繰返し自分に云い聴かせていた。

六日五夜の船旅は、冬の季節にしては稀らしく風がつづいて、淡路の浜育ちだけに、お登勢も仙吉も船酔いひとつしな

い楽な航海であつたが、そのかわり品川の港へ入るところから、肌を刺すような北風に白いものまでまじりはじめた。

品川から新橋までは、思いきつて乗合馬車を奮発した。去年の秋、新橋と横浜のあいだに陸蒸気というものが開通しているということであつたが、お登勢にとつては乗合馬車でさえ、心の咎めるような贅沢であつた。

馬車のなかから眺める東京の街は、二年前とは格段の賑いになつてゐた。西洋風の建物がめつきり多くなつて、自家用の立派な馬車や人力俵が通りに輻輳してゐた。自家用馬車にそり返つてゐるのは、たいてい山高帽子に黒羅紗のトンビ姿の官員ふうであつた。

新橋で馬車を降りると、それから先はどう行けばいいのか、お登勢には見当もつかなくなつた。加納市左衛門はいまでは牛込の二十騎町というところに移り住んでゐるということであつたが、それがどの辺なのかわからなかつた。

「女の足では少々きついね。人力を傭やア黙つていても連れていつてくれるよ」

最初に訊いた職人ふうの男は云つたが、乗合馬車を奮発したうえに、また人力俵には乗れなかつた。

お城の濠端へ突き当たたら、濠沿いに四谷見附まで行つて、そこでまた訊きな、と教えられた通り、濠端を桜田門のほうへ折れながら、

「天子さんて、ここにゐるのか……」

と、仙吉は凍えた手をこすり合わせながら、稀らしそうに石垣を見上げた。

つい三、四年前まで、將軍さんがここにゐたんだよ、と云いかけてお登勢はすり切れた角巻の襟をかきあわせた。

買も稲田の人たちも、このなかに住んでゐるお人のために、命がけで働いたはずであつた。そうして、いまではそのお人が江戸城の奥深くに住むようになったというのに、そのために働いた人たちは、北の果の未開地で飢えと寒さとたたかいながら、けもの同然のありさまで辛うじて生きてゐるにすぎない。

徳川さんが倒れば、みんながおなじように愉しく生きてゆけるはずだつた四民平等の約束も、實際に幕府が崩壊したいまになつてみれば、ただの掛声でしかないやうであつた。武士はなくなつたものの、官員がそれにかわり、土農工商の別は消えても、皇族、華族、士族、平民という新たな序列が生れてゐる。そうして、依然としてひと握りの人たちだけが暖衣飽食の贅を尽し、強権を握つて、貧苦に喘ぐ人民を支配してゐる。

いつたい、貢たちはなんのために命的にたたかつてきたのであろうか。世の中の仕組を変えろためだと信じて死んでゐた多勢の人たちはどうなるのであろうか——と、お登勢